



非
諧
七
部
集

附
負
外

九

中村俊定文庫
文庫 18
687
6





曠野集貞外



誰う毒をねおとさし母をたれり
市中とあきて朝のくさるる辰
又舞いふ東四明の麓
よきて花のこころはこねをんた
とつて佐川田毒六のうの山
あさあくとらひるまをさる
くうんす又

麥喰し原とさくさつり
世の尾陽の影ありは作
芭蕉公翁の傳へしを



笑—にけらつは、田野へ居る
實と世の感ある—
まきし人の中に虎の如きは
—の進を飛する人ありて
独色を穿つ—
おほい—のほし
様をきて實に—
あ—の字老
杜乃—や、
白—ひて

素堂

まをち—おぬる

この文人乃—
—
—

— 野水

様の— 荷今

おの— 越人

門— 水

凡の— 今

あ頁

武士乃鷹うしつゝあはれ
志をかりてつゝ流るる水
衣をき経とて出まきのうし
浦ふと降らねどはむいふ
去久已松の直をたふ乃揚
千勺をかむ山つゝつゝ
此さめつゝ一主梅も咲あり
あてともとなき夕月あつた

人 水 今 人 水 人 今 水 人 水

五箇の女を匠のつゝあはれ
秋夜なをさめつゝ人乃妻
明るやう西も東も鐘乃色
さめつゝつゝ利根の川舟
あつたつゝつゝかき雲
孫子つゝつゝつゝつゝ
あつたつゝつゝつゝつゝ
旅つゝつゝつゝつゝつゝ

人 水 人 今 水 人 今 水 人 今

柏木の脚元の比のつくこと
さくやういとのこまやえつる
月乃氣とく合とたり辻お積
秋こなるあくる事里乃酒桶
まのきく流す物と出る事
うねいとまのぬる彼乃糸糸
かこある諫と流こほあし
火箸かんとくくあつる

水 人 今 水 人 今 水 人 今 水

くくすものんさくくく
あせいのさくく海乃かく
まの事教まらさくく
押くまぬくまか様か
黒土ろあまの月とたは流く
大根さくくくく

人 水 今 水 人 今 水 人 今 水

遠はるや浪に志をたす瀬と亭

はる此舟る又酒のまをり星

のとまきーやあがり泊ふ何と解て

百足乃懼る茶とこりなあ糸

夕月の雲を白くをくら依

お寒の蓑を裾より引き降

糸洞

荷兮

昌碧

野水

舟泉

釣雪

秋乃をまよふとよきし地所そや 昌

一駄をくし是も古錦 龜洞

その色よきまきしる宮祢麻 荷今

糸すねはゆねゆふと年一栄 昌碧

くつとあつてあつた大藏造 釣雪

湯殿まいりのもまむいり川也 舟泉

涼一やと慈もくく川の端 野水

くくかきれくくは 月 荷今

秋風より女車の髪にたよ 龜洞

神そまらるるい 浮城も法輪 釣雪

時くくまのまのくくくく 昌碧

いさやあつてくくくくくく 野水

日乃いてやらふら何らん暖り 舟泉

んやまけくく 土もくくああ未 龜洞

向まへ寒也るほのふのいにて 荷今

垢離かく人の着ものみく 昌碧

あは

五

配所よつて千菓のか減さそつ

釣雪

さうらふふらふあまののちそく

舟泉

ゆくさよあひつまて赤腫と

野水

門をさくし 菖子よりひこむ

荷今

らふらふし足控所の敷地し

亀洞

たぬきあふれとわくと雨風

釣雪

ふらふらあふれとつきの下戸月

昌碧

やもたらぬ乃やとあつなほ

野水

つらつらおれはつて海の審の窓

舟泉

あまねとゆえ安房乃小湊

亀洞

夏の目やるとるよ泥の照台と

荷今

桶のかつてあふれしきひらと

昌碧

へなまに腸とさーてゆら

釣雪

つらつらあふれとるよ 穂進

野水

員一よ銀とさかりまのめ

舟泉

柳のうみかきさかり乃卵

松芳

夕やあ深おさるうへん

み文

きよいまやえゆる月影

荷守

秋草のさくもあまほい

松芳

弓ひささるる勝相模とく

舟泉

あ

ふも木との拾ひむとらむる 荷兮

ふもくく 砂の中み木のそ 冬文

火風の皮みまびるむく 舟泉

涙見みしやうら笑はつ 松芳

ふもくく 棠端まらしてそ 冬文

酒の半く膳もちてふい 荷兮

米く年一な順礼とをす 松芳

くまて双身のみ繪をせよ 舟泉

なうゆりともうら志をアとむの息 荷兮

月のたほらやぶる井一乃及 冬文

灯にまばたけひつてまの風 舟泉

珠をまてのまて脇息のう 松芳

陰辰と八齒くまの志はう 冬文

十日のこくみおしとむる 荷兮

山星の秋をうしと生 松芳

そ持かめくく入るやとむ 舟泉

あは

いさよ〜とあつたを馬の月の歌 荷今

馬乃ととを流してゐるのいさよ〜 冬文

さし〜とさきとあつたの宿のあはれ雨 舟泉

慈ぬま〜と蕎麦あふ〜と申 松芳

つ〜とと綿〜とあつたのいさよ〜 冬文

晴ぬ〜と提燈あつた 荷今

け〜の花とあつたすゝも〜 はあよやり 松芳

味噌〜とあつたの隣〜とあつた 舟泉

芳今乃門とあつたげと新分 荷今

あつた〜とあつた〜とあつた 冬文

春がね赤貝とあつた〜とあつた 舟泉

顔と〜とあつた旅〜と 松芳

いさよ〜とあつた瀑布とあつた あつた〜とあつた 冬文

あつた〜と面白〜とあつたの家 荷今

やどこまきす 結ぬ心のねもあそ

雨のつらみふくこころの口 野水

引持し 車ハ琵琶のたひきて 同

あそさうねくも人のうかひ 荷今

月の秋旅乃きこころあそ 同

一そ何にまひし 雨あ乃きこころ 野水

荷今

あそ

上

初あ〜〜〜くらせの寮の坊主は 水
菜畑畑むしめせ〜〜〜とせ〜 今
土肥をた〜〜〜とせ〜 全
下判おとす種をた〜〜〜 水
通後の〜〜〜とせ〜 全
六位のあ〜〜〜とせ〜 今
代よ〜〜〜とせ〜 全
錢一貫と銀一吊〜 水

月乃節のほ〜〜〜とせ〜 全
茶喫と茶と〜〜〜とせ〜 今
天仙羹〜〜〜とせ〜 全
うきか〜〜〜とせ〜 水
た〜〜〜とせ〜 全
夕〜〜〜とせ〜 今
駒のや〜〜〜とせ〜 水
秋のあ〜〜〜とせ〜 今

生見魂 水
八日乃月のらるやいるちく
山乃増又松と紙のかすく多数 水
をはいいくくくくくくとする 兮
是らの日や腹のきくくと引流ひ 全
太鼓たらんん一階子乃あるる 水
くくくくや森るる本質の竹枕 兮
えたるのくくや都年くりる 水

忠小ともあるぬ形よて一二年 全
底をつきくく住居かくくく 今
三方のあむつくくも火くくる 全
供奉乃竹鞋を各へくくこみ 水
後くや小塩大原堤城の也 全
くちひよりはるの川岸 筆

月さーのほろもろさ登の白もさあ
ねーろろろ柄をさーろろろろろ
用や宗鑑法師乃勺をすさーろろ
多のさろろろろろろろろろろろ

月さ柄をさーろろろろろ

蚊のねろろろろろろろろろ 越人

とろろろろろろろろろろろろろ 傘下

ねろろろろろろろろろろろろろ 同

さ木柱つえねろろろろろろろ 人

使の者ろろろろろろろろろ 同

あれこれと猫の子を選りわたり筆
 下
 ところどころのあやうきおぼろ
 同
 おもたもつけよ泣きすすらわ人
 大勢乃人よ法華をよこあそびく
 同
 月さらり夕く物籠傳う下
 下
 晴ふ橋も又くふらふらと皆
 同
 秋乃きーと女細みるカ
 人

くのきくくつらばきお背く
 同
 寂るるる書る文字結ゆるむ戸
 下
 花の賀るくくくくくくくく
 同
 鳥のの糊結くくくくくくく
 人
 くら翅く浦の管庫の橋下
 同
 内へくくくくくくくくくく
 下
 酔さゆのあはれくくくくく
 同
 多く志けつるを依雨乃際出し
 人

歌あまを指を種首おいしく
 下 同
 ちく献立のしめらるる女を
 下
 灯其を油を以て押く
 同
 白をたせしむるを
 人
 姉く凡そをのさるるはのあらし
 回
 半ちこそす ちかちか
 下
 ちつと月を影の親を
 同
 人の徳こそむすもあし
 人

にはさくく凡そ首を荷ひぬ
 下
 下とあまののち所中
 人
 ねらくや小法の宿を
 下
 皆同きよよ 佛
 人
 百万のちをいむるを
 下
 白樂をゆくさぬを
 人

深川の巻

越人

高つては志川とて空もくひまや

浦志をめぐりぬこのはら乃月

芭蕉

とぬさうは惟空を宍めてつん

全

理をたもれまゝは秋乃夕々池

越人

瓢箪の大きさと五石とらうりや

全

風よぬのゆゑに帰る市人

芭蕉

かゝるもの長安の是れは利の地 全

醫のねんきり月くもや 蕉 越人

いそしと作き乃きくもあぐ 芭蕉

ぬきとせ落やくきすけりたり 越人

比里と古きを蓄けぬるこ 芭蕉

足張とつと雨乃あげほの 越人

きあしやあふらこあさくあさく 芭蕉

うけひきたよき色乃つとく 越人

手とこのあけ唇もすくぬ 芭蕉

物いそくさとい舟ぬ 越人

月とむ比良のそねをよよ 芭蕉

やぐ雀ささつるころれ肌ぬき 越人

破れ戸の釘くら付漆木の末 全

えをハさひーこ来みひきハせ 蕉

家ぬくて眼紗まばら十す鏡 人

その杉あひぬる神子たものい 蕉

人 去ていさし法聖乃白ひく
 幼 衆と紅霧る堂とら片隅
 人 本とまきん風のあるく元体と
 蕉 垣植のこし歩露らとほれとく
 人 あやにくくおみ妹、リノあり先
 蕉 河のきくたつなみこつてあや
 人 月みくくとみくくは消さるに
 蕉 夜と遠く鶴といねふナリ

人 秋の雨をわくせぬらるはもいそ
 蕉 といくくあくく文字同くく
 人 いらくくく瓦底とら木茶屋
 蕉 馳走とぬれ子乃と柳とくく
 人 もの比従義とあくとくく也はし
 蕉 甲のくくくくく腥とくく

菊之伴なきはくも人の

きりしちり

具角

菊の伴なきはくも人の

とあさの月見あまのうたを子 越人

菊の伴なきはくも人の 全

飲えりあはくもあまのうたを子 角

誰よりあはくもあまのうたを子 全

菊の伴なきはくもあまのうたを子 人

何さる洞さしひるさしあしひく
静清前く舞をさしひる
空輝の舞魂乃能のねさ
あさるささるさ金二万五
いさるささるさあさあさ
やけさあさささささ
洞舞さ身さささささ
あさささささささささ
人 全 角 全 人 全 人

そさいろいろのあさとささささ
あさささささささささ
饅頭さささささささ
さささささささささ
西土あ東方朔と月ささ
さささささささささ
あささささささささ
あさのあさささささ
人 全 角 全 人 全 角 全

や、お母の涙を、おれは、

承つて、青を、原へ、

父、務、宿の、も、と、と、

い、い、の、を、を、を、

穴、い、ち、よ、塵、う、ち、

ひ、い、ち、よ、塵、う、ち、

満、月、と、不、断、松、を、

念、者、法、師、を、秋、の、

全

角

全

人

全

角

全

人

父、あ、く、神、お、こ、う、

弓、う、く、く、く、く、

を、こ、こ、こ、こ、こ、

を、の、こ、こ、こ、こ、

花、の、も、も、も、も、

ひ、い、く、く、あ、へ、

おのこ

ゆひて

全

角

全

人

全

全

嵐雪

おそろしし舟人の醒や死

秋を寒しいつと陽の縁 越人

月の宿書を引ちりす中な ねえ 全

介面茶の草一りけさり ねえ 雪

ちひあひく牧さす らぬ 全

川越ら終る 城下の らぬ 人

瘡癩白の透とまゝの^不齒の
 唱のささくす^す色あきりや
 後さひよや^のの^のの^のの^の
 乃能たるそかふる良人
 是れを礎こつてと川腕
 明日の妙友そと青の月影
 人 雪 同 越 人 嵐 雪 越

志くまら乃群々居る女あり
 つま子の醫者乃後深や
 ちのせり目もくもれと^ま世
 人 越 雪 人

野水

初雪をたこもりのひんま桐の末に

目のみーうまやしきのの初起 落梧

山川や物の喧嘩のそとさうすん 今

然ちる遠か〜んえかそ〜ん 野水

に女々さま押合月まる早外つ 同

あ〜〜〜ししち櫃から萩 落梧

川越り歩よそそけり獲の雨
 ねを痛くも旅のまゝいふ
 けをこもちりあくかきす様の
 すくきおふけのうきりい
 更なるのゆをむしりしとあ飲
 こそくちり起す相伝えり後
 岸の松あちあち力を足かきり
 旅をねうらのらきあ聲と
 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水

煮くお子あまのぬまこと一文
 下戸を皆いへ月の木平ろき
 身也齒のくくくも茶茶教あす
 りく足んさ様くもよの初午
 いひいもくもさきまぬ母がん
 山伏負て人志う候たりああ
 くらりくくくくくくくく
 糸車
 桃灯をそ縁園さくもけ
 水 梧 水 同 梧 水 梧 水

のしをながむむ髪を振おほひ

梧

きく物たはははははは

水

まらうーの馬のせう

梧

うふ府中を能福あつり

水

雨せくせれらるる面白

梧

柳ちのせし例の慈道

水

新なるく月丁とさり飛子十間

同

寂ーが秋浅女あはれなり

梧

長も上もくちまもー

水

木もくくちまもーの酒

全

おるの千魚備るる川地

梧

誰とアもまもー入見く

同

まも雨乃くちまもー

水

ぬもくくちまもー

梧

一筆に於て賣るものありて

かきひの是に瓶氷る朝

ささくは也正本を引く後

肩まぬを酒とよみ人

夕月能入さる早き梅さハ

たつゝに鯉をつゝこむ秋

一井

胤強

胡及

長虹

嵐彈

一井

書

天

里海く涌あう二三日 長虹

ま司く妻くわれら所々 胡及

向り焼くも涙よりおのろ 一井

葛籠とくさく切をく文 氣彈

うら〜も家紀あた〜と湯と 胡及

を〜ゆく東羊の越み雪鋤 長虹

た〜くゆりよ〜くあひてはら 氣彈

蛤とアさ〜家女中 一井

浦風之脛吹あくる月漁〜 長虹

みるもか〜〜化紀伴の魂を 胡及

み者乃き〜矢射てたる為 一井

蒜〜ぬ香〜遠さう〜り 氣彈

はもの〜焼あ〜くも脛を 胡及

氏の子乃綿乃裾〜あつ 長虹

えか〜〜内〜〜度 氣彈

座安ちある敷屋を約より 一井

木もよみにあふるるし松の枝 長虹

秤にふるる人し乃真 胡及

け年一なるる冬の峰もさ 一井

はくくもせきくついで入月 嵐弾

ききくく障子の陰踏るそき 胡及

こよいもきくもきほむまのよ 長虹

歩み極入道のまのころをた 嵐弾

衣引ふるる人のき 一井

毒ありと血一も地もきぬく 長虹

片風ふらふらも白雨 胡及

板もきく端もなき庭の因 一井

まゆかたもきくもきく丸 嵐弾

ぬくくもきくもきく雲 長虹

見わたすもきくもきく 胡及

諧仙堂藏板

寬政七年乙卯春三月再刻

皇都書林

筒井庄兵衛
浦井徳右衛門
野田治兵衛
梓行

芭蕉翁

俳諧七部集續編

深川卯辰集有續海強並心
款了芭蕉集卷小支原子等辨

小刻全部二冊出來

